

クレメンティア

監事 今村 清光

ユリウス・カエサルは、凱旋を記念して鑄造したコインにクレメンティア（寛容）と刻んだというが、ローマ帝国が数百年にわたって広大な版図を維持できたのは、多民族の習俗、宗教などを認めた彼の寛容の精神が継承されたからであろう。現在ほどこの寛容の精神が必要な時はないと思うのだが、一神教に由来する不寛容・対立は一層厳しさを増しているように思われる。

先般、第3期科学技術基本計画の策定に向けた文部科学省主催のシンポジウムに参加する機会があった。「基礎研究・長期目的的研究の中からイノベーションを生み出すストック型研究開発を再評価し、フロー型研究開発との調和をとっていく方式を確立すべきである」とか「時代の要請にあった融合学問の創設、地域・社会との連携強化を進めるべきである」といった様々なプレゼンテーションがあったが、「これからはダブルメジャー型の人材が求められる。専門性は重要だが長続きしなくなっているのに、シングルメジャーの人は他分野に不寛容である」という意見が印象に残った。

『精神と物質』（立花隆、利根川進著）によると「抗体の多様性生成の遺伝学的原理の解明」によって1987年度のノーベル生理学・医学賞を受賞した利根川博士は、自らの成功の要因として次の2点を上げている。

その1は、抗体の多様性はアミノ酸の配列そのものの違いに起因することから、免疫学者はアミノ酸配列を読み解くことに熱心だったが、生化学者の彼は、多様性の起源は遺伝情報すなわち遺伝子そのものにあると考えた。

その2は、抗体遺伝子が多いか少ないかの測定をハイブリダイゼーションの速度測定で行ったのだが、RNAの精製はその基礎がズサンだと反対の結果が出ることがあり、その点化学出身の彼は厳密な実験手法のトレーニングを積んでいた。

彼の場合他分野の考え方、技術・手法などにも通じていたことが幸いしたのだが、1人に複数のメジャーを期待するのは現実には容易でない。

森林総合研究所は、研究分野が多岐にわたっており、自然科学系シングルメジャーの研究者の層は厚いが、例えば林業の効率的生産システムに取り組むにしても経済性の検討にとどまらず生物多様性・生態的な回廊との関連をどのように考えるかといった視点も必要とされよう。

縫い目のない環境問題、山村振興のような地域問題などにおいては、異分野間のネットワークの形成、複合・融合分野の創成などの研究体制が重要性を増してくる。

こうした総合的研究を進めるには多様な価値観や手法などを認め合う寛容の精神が前提であり、これからは人文科学にまで広げての融合が大切になってこよう。



[\[巻頭言\]](#) [\[解説シリーズ\]](#) [\[報告\]](#) [\[おしらせ\]](#)

[\[所報トップページへ\]](#)